



今回の特集では、当時利用されていた方の「想い」を聞き、つなぎ、残すことを大きな目的としました。当時、大隅線で働いていた方や利用されていた方々に話を伺い、資料として残らない「想い」を形（記事）に残したいと思えます。取材を行った広報担当者2人は、大隅線が運行されていた頃を知らない世代。今はない大隅線の話に新鮮さや驚きも感じ、興味津々で聞き取りました。

右/昭和62年当時の垂水駅外観、右側が待合室  
下/大山さん宅に保管されている記念品



働いていた人の

「想い」

「ゆったりとした時間が流れる、雰囲気のある路線でした」そう話すのは、昭和44年から、18年間、垂水駅の窓口職員として働いていた大山かず子さん。午前5時30分から午後8時40分まで駅内で乗車券の販売や清掃、お客様対応等をされていました。

最後に、大山さんは「列車は待つ時間や走る時間も長いけど、友人と話したり、景色を見たりと、とても良いものでした。今も大隅線が運行していたら、きっとみんな楽しんでくれると思います」と思い出を振り返りながら、優しく私たちに話してくれました。きっと当時の利用者も大山さんの人柄に心安らいでいたのだらうと思います。



駅長制帽の置物とテレホンカード

遠方への切符は、鹿児島市の販売センターに電話で予約を取っていました。伝え間違いがないように、座席のABC DEは、アメリカ・ボストン・チャイナ・デンマーク・インランド、20日はハタチの日、と表現するなど工夫されていたそうです。また、列車の待ち時間が長いので、待合室でお茶を出したり、待合室で寝泊まりする人たちのために風



丁寧にインタビューに応じてくれた大山かず子さん

乗っていた人の「想い」

「大隅線、なんか良かったよね」笑顔でそう話すのは、当時通学で大隅線を利用していた、同級生5人。

高校1年の3月に大隅線が廃線となり、以降はバス通学となりました。大隅線が廃線となった時の想いやバス通学の違いなど、多くの思い出話に花が咲いていました。

車内から見る景色が良かった、雪で列車が坂を登れなかった、ブエン売りのおばさんがいた、怖い先輩がいた、便数が少ないので乗り遅れないように毎日大変だったなどなど。次から次にエピソードが飛び出す中、それでも一番の思い出は、「大変なこともあったけど、皆でワイワイしながら通学できたこと」。当時、列車は向かい合わせの4人席で、友



向かい合わせ4人席の大隅線の車内

達との会話が弾み、他校の友達とも話せる貴重な空間だったそう、「バス通学に変わったあとは、便数も増えたので友達と会う機会も減ってしまった」と大隅線の大切さを思い出すように話していました。廃線の日には、みんなで大隅線を利用して、駅で最後の便を見送り、涙を流す友人もいたそうです。

廃線後34年が経っても、大隅線への思い入れは強く、「素晴らしい景色と大切な思い出をありがとう。いつか復活してほしい、走る姿を見たら涙を流すかも」と大隅線への想いを話されました。



素晴らしい景色と思い出をありがとう  
もう一度、君の走る姿を見てみたい  
きっと涙を流すだろう



インタビューは同級会にお邪魔させていただきました。  
写真左上から/前田博さん、大山忠博さん、長友聡さん、吉崎亮太さん、大迫貢さん